

統 計

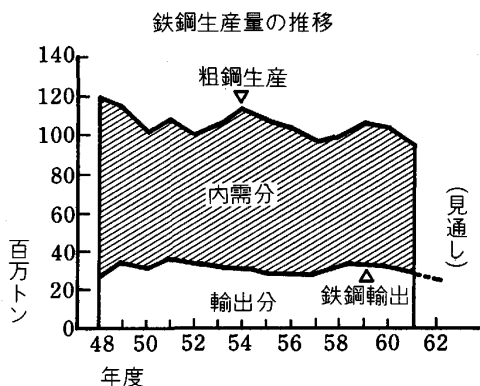
我が国における粗鋼生産量と輸出比率*

我が国の昭和 61 年の粗鋼生産量は 9 千 8 百万 t で 1 億 t を割り込み、前年比 6.7% の大幅減であった。62 年上期 (1~6 月) は 4 千 7 百万 t で前年同期比 5.4% 減となった。いつぼう、鉄鋼の輸出量は 61 年度に 4 年ぶりに 3 千万 t を若干割り込んだ。62 年度は 2 千 6 百万 t 前後に減ると予想されている。予想どおりであると 48 年度の 2 千 6 百万 t 以来 14 年ぶりの低い水準となる。いわゆる内需シフトが着実に進行しているといえる。

* 鉄鋼界報：昭和 62 年 8 月 21 日

日本経済新聞：昭和 62 年 10 月 25 日

(日新製鋼(株)周南研究所 長谷川守弘)



(出所：日本経済新聞 昭和 62 年 12 月 25 日)

編集後記

編集後記執筆の依頼を受けて、念のために昨年各号の後記を改めて読ませていただきますと、やはり鉄鋼業の不景気と本誌の編集に及ぼす資金及び内容面での影響について触れているものが多く拝見されました。

確かにどんな産業も人間同様、ライフサイクルがあり、日本の鉄鋼業が壮年期に達していることは否めません。個人的なことを申しては恐縮ですが、医者からコレステロールだとか中性脂肪とかの専門用語により老化現象を指摘されている小生としましては、わが身と鉄鋼業が二重写しに見えます。先日もソフトボールの試合で足の怪我をし、いつまでも若くないことを思い知らされましたので、余計憂鬱な気分がこの原稿を書いています。不吉なことですが、どうやってソフトランディングするか、つまりライフサイクルを全うするかをともに考えなければならないところですが、鉄鋼業の方はさすがに小生よりははるかにしたたかです。最近の急激な円高や株価の暴落にもかかわらず、薄日がさしてきたとのことで、これも一喜一憂の中の一つとは思いますが、御同慶の至りであります。

本誌の発行については経費の削減のために無駄を省き、作業の合理化を図るよう努力中ですが、会員各位にも講演概要集の別売りという実質的値上げをお願い

するなど、編集業務をお手伝いする私どももかなり緊張した一年を送りました。本年も前述の薄日によって気が緩まないようにしたいと思います。

それにしても会員の多くの方が専門分野をシフトされている現状に本誌がいかにか的確に対応するかは重要な課題であります。一方、鉄鋼分野での技術開発や研究成果の発表は報文、口頭を問わず、国内では本誌及び新しい「材料とプロセス」誌に課せられた重大な使命であり、これが最大の存在理由でありますから、決してないがしろにはできません。その意味で本誌が鉄鋼業とともに命長く活発で、次の世代に魅力的であるためには、今後の鉄鋼技術開発の方向性と指針を明示することが不可欠であり、現在活躍中の世代の責任だという気が致します。このような内容の記事を精神論ではなく具体的に書いてくださる方を歓迎致します。

事務局のお嬢さんの御注文にしたがつて柔らかく書くつもりでしたが、上のおり鉄のように硬い内容になってしまいました。これも鉄にどっぷり浸かっている因果かもしれません。

会員各位の本年の御壮健と御活躍をお祈り致します。

(N. S.)